

[D年] 聖霊降臨節第15主日(2020年9月6日)**【旧約聖書日課】出エジプト記13章17～22節**

17さて、ファラオが民を去らせたとき、神は彼らをペリシテ街道には導かれなかった。それは近道であったが、民が戦わねばならぬことを知って後悔し、エジプトに帰ろうとするかもしれない、と思われたからである。18神は民を、葦の海に通じる荒れ野の道に迂回させられた。イスラエルの人々は、隊伍を整えてエジプトの国から上った。19モーセはヨセフの骨を携えていた。ヨセフが、「神は必ずあなたたちを顧みられる。そのとき、わたしの骨をここから一緒に携えて上るように」と言っ、イスラエルの子らに固く誓わせたからである。20一行はスコトから旅立って、荒れ野の端のエタムに宿営した。21主は彼らに先立って進み、昼は雲の柱をもって導き、夜は火の柱をもって彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することができた。22昼は雲の柱が、夜は火の柱が、民の先頭を離れることはなかった。

【使徒書日課】**エフェソの信徒への手紙5章11～20節**

11実を結ばない暗闇の業に加わらないで、むしろ、それを明るみに出さなさい。12彼らがひそかに行っているのは、口にすることも恥ずかしいことなのです。13しかし、すべてのものは光にさらされて、明らかにされます。14明らかにされるものはみな、光となるのです。それで、こう言われています。

「眠りについてる者、起きよ。

死者の中から立ち上がれ。

そうすれば、

キリストはあなたを照らされる。」

15愚かな者としてではなく、賢い者として、細かく気を配って歩みなさい。16時をよく用いなさい。今は悪い時代なのです。17だから、

無分別な者とならず、主の御心が何であるかを悟りなさい。18酒に酔いしれてはなりません。それは身を持ち崩すもとです。むしろ、霊に満たされ、19詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。20そして、いつも、あらゆることについて、わたしたちの主イエス・キリストの名により、父である神に感謝しなさい。

【福音書日課】**ヨハネによる福音書8章12～20節**

12イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」13それで、ファリサイ派の人々が言った。「あなたは自分について証しをしている。その証しは真実ではない。」14イエスは答えて言われた。「たとえわたしが自分について証しをするとしても、その証しは真実である。自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、わたしは知っているからだ。しかし、あなたたちは、わたしがどこから来てどこへ行くのか、知らない。15あなたたちは肉に従って裁くが、わたしはだれをも裁かない。16しかし、もしわたしが裁くとすれば、わたしの裁きは真実である。なぜならわたしはひとりではなく、わたしをお遣わしになった父と共にいるからである。17あなたたちの律法には、二人が行う証しは真実であると書いてある。18わたしは自分について証しをしており、わたしをお遣わしになった父もわたしについて証しをしてくださる。」19彼らが「あなたの父はどこにいるのか」と言うと、イエスはお答えになった。「あなたたちは、わたしもわたしの父も知らない。もし、わたしを知っていたら、わたしの父をも知るはずだ。」20イエスは神殿の境内で教えておられたとき、宝物殿の近くでこれらのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

出エジプト記13章17～22節

17ファラオが民を去らせたとき、神は彼らをペリシテ人の住む道に導かれなかった。実際それは近道であったが、民が戦いを目前にして後悔し、エジプトへ戻るかもしれない、と神は考えたからである。18そこで神は葦の海に通じる荒れ野の道へと民を向かわせたので、イスラエルの人々は隊列を整えてエジプトの地から上った。19モーセはヨセフの骨を携えていた。ヨセフが、「神は必ずあなたがたを顧みられる。その時、私の骨をここから携えて上らなければならない」と言って、イスラエルの人々に固く誓わせたからである。20一行はスコトをたち、荒れ野の端にあるエタムに宿営した。21主は彼らの先を歩まれ、も夜も歩めるよう、昼は雲の柱によって彼らを導き、夜は火の柱によって彼らを照らされた。22昼は雲の柱、夜は火の柱が民の前を離れることはなかった。

エフェソの信徒への手紙5章11～20節

11実りのない闇の業に加わらず、むしろそれを明るみに出しなさい。12彼らがひそかに行っていることは、口にすることも恥ずかしいことなのです。13しかし、すべてのものは光によって明るみに出されて、明らかにされます。14明らかにされるものはみな、光だからです。それゆえ、こう言われています。

「眠っている者よ、起きよ。

死者の中から立ち上がれ。

そうすれば、

「キリストはあなたを照らされる。」

15そこで、知恵のない者ではなく、知恵のある者として、どのように歩んでいるか、よく注意しなさい。16時をよく用いなさい。今は悪い時代だからです。17だから、愚かにならず、

主の御心が何であるかを悟りなさい。18酒に酔ってはなりません。それは身を持ち崩す元です。むしろ、霊に満たされ、19互いに詩と賛歌と霊の歌を唱え、主に向かって心から歌い、また賛美しなさい。20いつも、あらゆることについて、私たちの主イエス・キリストの名により、父なる神に感謝しなさい。

ヨハネによる福音書8章12～20節

12イエスは再び言われた。「私は世の光である。私に従う者は闇の中を歩かず、命の光を持つ。」13それで、ファリサイ派の人々が言った。「あなたは自分について証しをしている。その証しは真実ではない。」14イエスは答えて言われた。「たとえ私が自分について証しをすとしても、その証しは真実である。自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、私は知っているからだ。しかし、あなたがたは、私がどこから来てどこへ行くのか、知らない。15あなたがたは肉に従って裁くが、私は誰をも裁かない。16しかし、もし私が裁くとすれば、私の裁きは真実である。なぜなら私は独りではなく、私をお遣わしになった父と共にいるからである。17あなたがたの律法には、二人が行う証しは真実であると書いてある。18私は自分について証しをしており、私をお遣わしになった父も私について証しをしてくださる。」19彼らが「あなたの父はどこにいるのか」と言うと、イエスはお答えになった。「あなたがたは、私も私の父も知らない。もし、私を知っているなら、私の父をも知っているはずだ。」20イエスは神殿の境内で教えをおられたとき、宝物殿の近くでこれらのことを話された。しかし、誰もイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・9月6日「聖霊降臨節第15主日」の日課主題は「新しい人間」。この主題設定は、使徒書日課(エフェソ5章)の文脈に依拠している。使徒書はいずれも教会に連なるキリスト信者に宛てて記されており、「洗礼」による「新生」を受け入れ、「古い自分」を捨てて「新しいキリストに従う者」の人生を始めた者たちに向けて勧めが語られている。「新しい人間」をどのようなイメージで語るかは文書(書簡)によって異なるが、教会が「キリスト者」として生きる者の明確な人間像を有し、それを一つの目標にして信仰共同体としての歩みを共にしていたことは確かであるし、どの使徒書もそのことを語ることに多くを費やしている。

・キリスト者の「新しい人間」像は、端的に「主イエス・キリスト」を目標・モデルとしたもので、「キリストに倣う(イミタチオ・クリステイ)」ことを自己に課す信仰者観として広く教えられてきた。これらの教えの根拠となる神学は「聖化論」として論じられてきたが、その見解は、しばしば互いに相容れないものとして教派の壁を形成するものとなってきた。「聖化論」は、「救済論」と対を為すもので、「義認と聖化」あるいは「新生・聖化」というようにセットで論じられてきた歴史がある。「聖化論」における一つの重要な論点は、「新生」によって救われた人間が「聖化」によって「キリスト」の形に近づく過程において、人間自身の意志や行為はどれほどの位置を持ちうるのかという問題である。これは、「自由意志か、奴隷意志か」という論題設定として知られる問題で、古代教会以来、繰り返し論争されてきた(ただし、この論争は、「救済」に焦点が当てられているのか、「聖化」に焦点が当てられているのか、不明瞭な扱いがされることで混乱している場合もある)。一般に、プロテスタント教派は「自由意志」を否定し「奴隷意志」を前提とした神学を構築しているとされる通念があるが、こと「聖化論」における「意志」の問題に関しては立場に幅があり、「奴隷意志」に徹した聖化論を展開する立場と、一定の「自由意志」を容認した聖化論を展開する立場とがある。

旧約日課(出エジプト13章より)

・「出エジプト記」の文書としての概要は、前週の資料を参照。日課箇所は、モーセに率いられてエジプトを出た民の最初の行程を物語る箇所、そこに神の意志が明確に働き、民が神の働きの中に置かれて旅を進めていくという基本的な立ち位置が告げられている。

・「ペリシテ街道」は、「ペリシテ人」の住む地域である地中海沿岸沿いの道を指している。「ペリシテ人」は、古代地中海で「海の民」と呼ばれる人々のうちカナン地方に侵入してきていた人々を指す呼称で、民族・部族としてのルーツは明らかではない(ミケーネ文明との関係が示唆されている)。イスラエル王国時代の初期(サウル、ダビデの時代)に繰り返し内陸部に侵略

してきた人々が「ペリシテ人」と呼ばれているが、出エジプトの時代と同じ人々かどうかは分からない。いずれにしても、「イスラエル正史」において、「ペリシテ人」は最も厄介な仇敵の一つとして描かれており、紀元135年のユダヤ人武装蜂起(バル・コクバの乱)を鎮圧した皇帝ハドリアヌスによって「ユダヤ」から改称された属州名「パレスティナ」の語源となっている。

・19節「ヨセフの骨」の件は、創世記50:25の伏線を踏まえて記されており、ヨシュア記24:32の埋葬譚により回収されている。これは、「出エジプト記」から「申命記」までで明瞭なまとまりを持つ「モーセ物語」を、「創世記」の「族長物語」と、また、「ヨシュア記」以降の「カナン定住物語」と接続させる役割を果たしている。

・21-22節「雲の柱」は、「モーセ物語」で繰り返し用いられる神の臨在の象徴。セットで扱われている「火の柱」は、「雲の柱」ほどの用例はない。「雲の柱」は、おそらく一種の「のろし」を象徴的に意味づけたもの(士師記20:40参照)。同じものが、夜間であれば炎で光って「火の柱」に見えたであろう。

使徒書日課(エフェソ5章より)

・「エフェソの信徒への手紙」は、使徒パウロの書簡の一つで、「コロサイの信徒への手紙」と類似した構成・内容を持つ。聖書学者によっては、使徒パウロの真筆ではなく弟子の手による偽書(パウロの名を用いた文書)とみなす者もあるが、多くの仮説に基づいた主張であり、蓋然性を評価するのは困難である。むしろ、古代教会以来、「パウロ書簡集」に含まれて読まれてきたことに意義があり、「パウロ書簡」として読むことで古代教会が聞き取った信仰の書としての価値を十全に理解することになる。「エフェソ」は、アナトリア半島西部のエーゲ海に面した地域に集約した諸都市の一つで、環状街道によって「スミルナ」、「ベルガモン」、「ティアティラ」などの都市と結ばれ、各都市に生まれ「アジアの七つの教会」と呼ばれた教会群の中の一つが存した。

・日課箇所は、4:17から始まる勧告のまとまりの、最初の区切り目を構成する。「光」と「闇」を対比的に用いて信仰者の自己理解を語ることは、パウロ書簡の中では比較的限定的であるが無いわけではない。Iテサロニケ5:5-8やローマ13:11-14には、類似の教えが記されている。

・14節に引用句が記されているが、出典引用元は不詳。イザヤ60:1「起きよ、光を放て。…」との類似性が指摘されるが、引用関係は明らかではない。しかし、引用として記していることから、初代教会で一定程度共有されていたものがあつたと推察される。

・19節「詩編と賛歌と霊的な歌」の原語は、それぞれ「プサルモス」、「ヒュムノス」、「プニユマティコス・オーデー」で、前二者はそのままヨーロッパ系言語の典礼用語に継承されている。

福音書日課(ヨハネ 8 章より)

・日課箇所は、前週に続く部分であるが、前段の「姦通の女」の逸話の結末では、主イエスの周りに集まっていた人々は皆立ち去ってしまっているはずなので、文脈上、場面設定に齟齬が生じている。しかし、この後 10:21 までの間には、主イエスがユダヤ人との間で論争的な発言をされた逸話が繰り返し置かれており、その場面設定は必ずしも厳密に考えられていないので、「論争集」としてまとめられているのだろう。日課箇所の場面は、20 節で「(神殿の境内の)宝物殿の近く」で教えられたときと設定されている。「宝物殿」は、「賽銭箱」と訳されて「やもめの献金」の逸話に出てくる(マルコ 12:41,43、ルカ 21:1)。

・12 節「わたしは世の光である」は、ヨハネ福音書で繰り返し出てくる主イエスの自己表示(9:5、11:9)。一方、マタイ福音書には、弟子たち(人々)に向かって「あなたがたは世の光である」(マタイ 5:14)と告げられる箇所がある。この二つの「世の光」を結ぶ発想が、パウロ書簡などに見られる「光にさらされ…光となる」、「キリストはあなたを照らされる」という関係である。

・この場面で主イエスが「わたしは世の光である」と告げられたことを描くのは、7:37~38 と対になっているからである。すなわち、この場面は「仮庵祭」のエルサレム神殿境内であり、その祭りは「出エジプト物語」における「荒野の旅」を記念するものであるが、神殿では、荒野で「生きた水」(7:38)が与えられ、夜は「火の柱」の「光」で示される神の臨在によって守られていたことを、「水」や「灯火」を盛大に用いた演出で記念していたとされる。それらに対して、父である神との一体性を主張される主イエスは、「我こそは生きた水を与える者」、「世を照らす光」と宣言されたのである。

来週の誕生日 (9月6日~12日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-148 番「全地よ、主に向かい」(I 4 番「よろずのくにびと」、I 5 番「こよなくかしこし」)は、カルヴァンの指導下でジュネーブ詩編歌に倣って作られた「英語ジュネーブ詩編歌」(~1562 年)に収められた詩編 100 編の歌。I 4 番や I 5 番は、同じ詩編歌の別版(編詞者違い)。

・21-575 番「球根の中には」は、20 世紀中盤の米国で合同メソジスト教会が成立した時期に夫の牧する教会で音楽奉仕者として活動した音楽家ナタリー・スリースの創作讃美歌。合同メソジスト教会の讃美歌集に収録され、好んで歌われてきている。

・21-403 番「聞けよ、愛と真理の」(= I 453「聞けよ、愛の言葉を」)は、19 世紀末から英国で日曜学校讃美歌の作曲出版に専念した音楽家ヘンリー・E・ニコルが世界宣教の歌として作曲し 1896 年出版の日曜学校讃美歌に収録したもの。20 世紀に入り、英語圏で一般に広く歌われるようになった。

21-148「全地よ、主に向かい」

GENEVAN 100 (OLD 100TH)

1. All people that on earth do dwell, / sing to the Lord with cheerful voice; / him serve with mirth, his praise forth tell; / come ye before him and rejoice.
2. Know that the Lord is God indeed; / without our aid he did us make. / We are his folk, he doth us feed, / and for his sheep he doth us take.
3. Oh, enter then his gates with praise; / approach with joy his courts unto; / praise, laud, and bless his name always, / for it is seemly so to do.
4. For why? The Lord our God is good: / his mercy is forever sure; / his truth at all times firmly stood, / and shall from age to age endure.
5. To Father, Son, and Holy Ghost, / the God whom heav'n and earth adore, / from us and from the angel host / be praise and glory evermore.

21-575「球根の中には」

In the bulb there is a flower

1. In the bulb there is a flower; / in the seed, an apple tree; / in cocoons, a hidden promise: / butterflies will soon be free! / In the cold and snow of winter / there's a spring that waits to be, / unrevealed until its season, / something God alone can see.
2. There's a song in every silence, / seeking word and melody; / there's a dawn in every darkness / bringing hope to you and me. / From the past will come the future; / what it holds, a mystery, / unrevealed until its season, / something God alone can see.
3. In our end is our beginning; / in our time, infinity; / in our doubt there is believing; / in our life, eternity; / In our death, a resurrection; / at the last, a victory, / unrevealed until its season, / something God alone can see.

21-403「聞けよ、愛と真理の」

We've a story to tell

1. We've a story to tell to the nations, / that shall turn their hearts to the right, / a story of truth and mercy, / a story of peace and light, / a story of peace and light.

Refrain:

For the darkness shall turn to dawning, / and the dawning to noonday bright; / and Christ's great kingdom shall come on earth, / the kingdom of love and light.

2. We've a song to be sung to the nations, / that shall lift their hearts to the Lord, / a song that shall conquer evil / and shatter the spear and sword, / and shatter the spear and sword.

(Refrain)

3. We've a message to give to the nations, / that the Lord who reigneth above / hath sent us his Son to save us, / and show us that God is love, / and show us that God is love.

(Refrain)

4. We've a Savior to show to the nations, / who the path of sorrow hath trod, / that all of the world's great peoples / might come to the truth of God, / might come to the truth of God.

(Refrain)